

(あらき ひろゆき・広島大学)

内田るり子著『田植ばやし研究』

大貫紀子

長年声楽家として日本歌曲の普及に努めてこられた著者が、一方で音楽学者として日本をはじめ広く音楽を追究され、その研究成果の一部をまとめられたのが此度の『田植ばやし研究』である。序によれば演奏家として活躍しておられた著者が音楽研究に入られるようになつたのは、一九五九年六二年のウイーン留学中に声楽を学ぶかたわら民族音楽学の方法論を修められたことによる。そして研究の最初のテーマとして着手なさつたのが中国地方の田植ばやしだつたが、日本に留まらず、本書内題のサブタイトルにもあるように民族音楽学という広い立場から研究をすすめてこられた。従つて本書の特色もそこにあり、同時に日本を出発点とした将来への目的もうかるがえる。

さて書名の「田植ばやし」であるが、これは今日中国地方に伝承される所謂「離子

田」を中心とした、またそれに類する田植の音楽的形態の総称として使われる。単に田植のはやしと广義には、例えば伊賀宮御田植祭（三重県志摩郡磯部町）の如き場合も含まれてしまうかと思うが、ここでは序説に記されるように音頭（男性）が樂器を奏しながら早乙女（女性）と掛け合つたい、そこにはまた男性による打樂器の離子がつくという形態を指している。さらに田植神事などの場合と異なるのは、何よりもその音樂が「労働のリズムと密接にむすびついている」ことである。こうした田

植ばやしがかつては日本各地に行なわれていたであろうということであるが、それにしても、まで遡『采華物語』に遡れるような田植の樂團が今日中国地方にのみ集中的に残存しているのは實に興味深いことである（広島県に関しては町田嘉章先生が、『日本民謡大観　中国篇』でその理由を推論し

ておられる）。知られるように労働状況が目まぐるしく変わったため、かつて仕事にうたわれていたと伝えられる歌は大方が座敷に納まってしまい、地方によつてはそのようなことすらもなく消えてしまった歌が少なくない。そうした現状で、保存にすぎなくとも、音樂だけというのではなくともかく現場で行なわれてきたこの田植の音樂は貴重な遺産といえよう。

ところで、これまでになされた田植ばやしに関する音樂面からの調査研究や資料はきわめて少ない。実質的な樂譜資料は『日本民謡大觀』（日本放送出版協会）の中国篇および四国篇ぐらいであり、それに『広島県の民謡』（中国放送）も加えられようが、研究書としてまとめられたのは本書が初めてである。



本書は一九六三年以来の調査研究を紀要・機関誌等の論文を含めて集大成されたものである。内容は、総論・各論・日本列島周辺の田植歌そして結論の四部に分けられ、本書の主眼が音樂研究にあることは言うまでもないが、文学・民俗・社会・歴史の各方面からも詳しく述べられている。本書が

このような音楽外的な見地からも論考されているのは、最初の田植ばやしの音楽研究書としては当然啓蒙的な立場をもつてゐる点から意義がある。しかしそれ以上に音楽研究からは、本書のこうした総合的な観点に立とうとされているところにとくに注目したい。というのは音楽学的研究においてはとくに音楽面からのみの考察に終りがちであるが（なにも音楽学に限つたことでないかもしないが）、本書は、テーマを多面的に研究することによってそれが却つて音楽的考察をより充実させることにもなるという事を実証しているのである。音楽を研究する者には貴重な教示である。それについても、著者のこのよう幅広い考察には、自序や跋（牛尾三千夫先生）にも示されるように、そのスタートにおいて民俗や歌謡など関連諸学の優れた先駆に出会われたという羨ましい一因もあつたかと思われる。

第一部総論ではその前半が田植ばやしの地域的分類・歴史・民俗・文学の論考に尽される。その最初に、言語や古代文化圏から既に二大区分される備後系・安芸系という対照的な地域的分類は、田植ばやしにお

いても該当することが提示される。そして田植ばやしにおいてはその二系統との関係からさらに具体的に七分類を設定する。この分類は既に一応体系化されているところの詞型を規範としたものであるが、音楽的にもこの七分類それぞれに特色を見出すことができる。その地域的分類は分布図によつて一目で識別することができるが、このような顕著な地域性は中国地方の他の音楽とはいかなる重なり合いを示すか、言い換えれば中国地方の音楽文化圏のようなもののベースにならないか、新たな関心をひきおこす。分布図では島根県の南端山口県寄りの地域（鹿足郡辺りか）に備後系が飛び地しているのが目を引く。なお瀬戸内海側は空白になつてゐるが、『広島県の民謡』によれば離子田系の歌謡が僅かながら残り、また仕事田にうたわれるという近世調の歌謡（かつま型歌謡群）が残つてゐるよ

うなので、今からでも少しは空白を埋められるかもしれない。この章では最後にこの地域的分類と現存の曲種についてまとめてゐるのである。この章では最後にこの地域的分類用語などが混然と使われてゐるためか田植歌謡に詳しくない者にはすぐには理解しにくくないように思われた。例えば先に歌謡と

器楽の二分類があつて、歌謡ならば田植歌、苗取歌などの曲種別にそれぞれまとめて示されると幾分わかり易くなるのではないか。ついでに、本書の性格上歌謡や民俗関係の用語のいくつかについては初出時に簡単な説明（注でも）を施していただけたのがたいと思われるところがあつた。

私は一九七五年、古態を残していると言われる広島県山県郡大朝町新庄の離子田を見学したのであるが、それまで単なる田植の作業風景しか知らなかつたため、その大らかで華やいだ光景には目を見張つたものである。ただその離子田は既に保存の状態にあり『田植草紙』にみる一日に比べるとかなり短縮されたものであつた。しかしながらこの田植は一日の作業に合せたみごとな演出ぶりで進行していったことが、本書の「田植ばやしの民俗」および「文学」の章で、島根県能義郡広瀬町東比田の事例や、『草紙』歌謡の例示によつてわかる。朝歌から晩歌までの完成された構成には、その高い文学性と共に感心させられる。一体どのようなところからこれまでの発展を遂げたのであろうか。

第一部の後半は音楽研究に當てられる。

その冒頭に提示された楽器（第1分類）と詞型・曲型（第2分類）からの分類は、本書の成果を整理したものである。まず楽器、すなわち歌謡以上に田植ばやしを特色づけるものとして重要な囃子について試みられる。分類は、数種の楽器を使用する大田植において主要楽器であるとともに、とくに相違の顯著な「太鼓」を規準として行なわれ、その結果は安芸系（田鼓）と備後系、（大太鼓）にきわめてすつきりと二分される。江川東岸に位置し、第2分類では中間的性格をもつ点で問題のある小笠原流も、太鼓のみならず楽器編成は完全に安芸系に属している。また太鼓に関して、とくに小太鼓の有無は大太鼓のリズムや奏法にかかわってくので無視できないが、ここでは安芸系田鼓の場合にのみ小太鼓が使用されるということであるから両系を比較するまでもなく、この点からも安芸・備後両系の相違ははつきりしてくる。とくに太鼓については後節で詳述され、リズム・パターンや奏法はもちろん、安芸系の特色である所作についても歌詞や楽譜に当てはめて記述されているのでたいへんわかりやすい。第2の詞型と曲型の分類では、詞型による分類が曲型によって、即ち音楽的にも裏付けられ

た点で本書の重要な一節となつてゐることは言うまでもない。

ところで曲型の研究からは当然採譜例が活用されてくる。勿論本書は楽譜集ではないが、楽譜は先述のように少ないため、ここに示される譜例は資料としても重要である。ただ資料としては、いつ・いかなる条件でのものがデータが必要となり、またそれは詳しいに越したことはない。例えばある歌が短期間に大変化してしまうようなことはあり得ないとしても、完全に同じとうともあり得ない。同一の歌を時をちがえて記録した場合偶然にしろどこかに異同が生じる。そして、近世の都節音階の確立ほどの際立つた変化でなくとも、偶然にしろその異同がそのまま後へ伝承されてゆく可能性もあり、場合によつてはその異同が音楽の本質に触れることがある。という点からその楽譜に関する録音データが必要になつてくるわけで、本書も各論に調査年が記されてはいるが、直接各譜例にあるいはまとめて、データを記されるとなおかつたと思う。同一曲の旋律の異同の例としつて、安芸系標準型田植歌謡の新庄の例では『日本民謡大観』および私が見た一九七五年の場合とは異なる部分があり（譜A）、

譜A 広島県山県郡大朝町新庄 田植歌

内田るり子採譜

けさのかんざしあさくさかーりか
けさーのーかみーざしめあさ(ア)くさかーりか

『日本民謡大観 中国篇』

その他の譜例についても少なくとも『大観』との異同が多少みられた。採譜に關しての問題や誤植はごく少なく、強いて挙げれば「原田節」で、都節音階と説明されている部分が譜例では律音階になっているがこれは誤植である。またこの曲を『大観』(中国篇)でみると、中間部に二、三カ所都節化した部分があるほかは律音階である。とするところは(個人的なクセでなければ)いつの間にか(少なくとも著者が採集した時点では)完全に都節化していたわけで、二つの採集例によつてひとつの曲の変化を実例としてみることができることになる。

さて第2分類をするに當り著者は、音樂的な基本のタイプとしてA(親歌・子歌)、B(備後系ダン・ツケ他)、C(オロシ)の3つを、これに該当しないタイプを4つ挙げ、主に以上のタイプの組合せによって田植ばやし歌謡が構成されていることを分析解明してゆく。このタイプの設定で特徴的なのは、安芸系の特色であるオロシ構造を一括したものと考えずにそこからオロシを切り離すことによって、オロシ型歌謡群というものを浮び上らせたことであろう。そして

このグループを音樂的に考察することによって、備後地方の供養田専用曲「大拍子」(安芸系の田鼓を用いるのがユニーク)が音樂の上では安芸系の類曲と本質的には相違がなく、従つてこの曲が安芸系と関わりをもつてゐるということを推定されているのである。この点は音樂外的立場からも注目されるであろう。

A型・B型についてみれば、A型の曲型はaa'またはabとあるが(譜例はabのみ)両者は音樂的には大きな相違である。またB型の曲型はabのみ挙げられるが、譜例の島根県邑智郡石見町青笹の「ゆりうた」は該当部分がaa'であるから、A型同様にaa'も加えられるであろう。従つて、A・B・Cの曲型が異なり旋律的にも異なることは譜例で明らかではあるが、楽曲形式上は同質的といえる。その点で、この両型におけるaa'(aaの反復型はあり得ないか)とabとに曲例数の差異があるとすればどういう点か(A型B型の差、地域差 etc.)、このことは歴史性、地域性を考える上でのひとつ問題とならないだろうか。

さて第2分類の項では「ゆりうた歌謡群」が備後系との関連から興味深い研究対象となつて

いるが、「ゆりうた」に「必ずヤーレといふ離しことばが挿入される」とは限らない。そうであるから(『大観』中国篇)、むしろこれも純粹に音樂的に分析することによつてゆりうたを軸とした一連の類歌の相互關係あるいは地域性をみることができるのではないか。また田植ばやしにおいては例外的な短章の田歌についても見落せない。譜例によれば、短いながら起伏のある旋律や音程の跳躍などどの歌もきわめて個性的である。これらを「田植草紙歌謡が構成される以前からあつたろう」(歌詞の面からか。筆者注)と推測されている点からもさらに追究していただきたいグループである。

田植ばやしに用いられる樂器については先に少し触れた。胴長で横打ちの田鼓と平たくて上面を打つ大太鼓の二種の太鼓は独特であるが、さざらもまたユニークである。さざらは樂器自体編ざざらと摺ざざらの対照的な二形態があると同時に、地方によつては獅子舞やその他の呼称にもなつており、その発生と変遷とが興味深い樂器である。田植ばやしで用いられるさざらは、編ざざら(これは主に田樂囃に用いられる)

ではなく摺ざさらの方であるが、田植ばやしではこれにも形態や奏法に地域性が伺えるのである。とくに安芸系では摺ざらをわんぱいが打ちならす、という点に注目した。

現在ささら 자체がこの地域では所謂摺ざさらの完全な一組（わらの竹とわら）（い）ではなく、片方のわらの竹のみが残っているということである。これは奏法との関係による結果なのであるうか。二本のわら竹を打合せる地域（大朝町）のほかサゲ杖をささら竹で叩く地域（江川右岸・『大田植と田植歌』一八七頁）もあり、本書の写真例によれば那賀郡三隅町井野のささらの摺るための実質的な形態をなしていないようである。わら竹の形態と奏法をもう少し地域別に具体的に知りたいし、この点を本書でも触れていただけになるとよかつた。なお、備後系ではモドキが「田植の興趣をそえる」程度に扱われる摺ざさらが、芸系ではわんぱいが指揮する道具として用いられ、機能的にはむしろこちらの方が重要なものになっているとのことであるが、単に楽器的機能から言えば音色・音量などそれほど効果的ではないように思われる。元来は「摺る」ためのものでも、指揮をするには「打合せ」の方が拍子をとりやすい

ということで自然に変化していったのか、それとも何か別の打合せの物と偶々部分的にすり合つたとでもいうのであるうか。

第一部の締め括りは音楽的諸要素の記述に当たられる。音階については律音階が多い点が明らかにされ、歌詞の面では中世に遡り得るという田植ばやし歌謡が音楽の面でもまた古い要素を多く含んでいることが指摘される。このことは日本音楽史にも重要である。また備後系に呂的な律音階が見出されたことも貴重であるが、とくにこの音階例には地域的な頻度の濃淡はないだろうか。山口県側に飛び地した地域ではどうであろうか。一般的に田植歌を見るならばやはり民謡音階が多く、律あるいはその混合形の例は少くなっているといえる。田植作業歌の中心となる田植歌に、もともと身近かな民謡音階が多いのは自然であろうが、中国地方の場合には律音階や律と民謡音階の混合形も著しい率を占めているといふことは注目に値する。

テンボについても素通りできない。大田植では「本ユリ」、仕事田では「半ユリ」、とうたい分けられるという例もある。しかししながら、作業とテンボがとくに田植ばやしにところで植え始めるという報告もある。

おいては密接であり、歌が作業の能率に大きいにかかわっていったことがこの項で例証される。田植ばやしでは、太鼓を伴わない短章の田歌のようにフリーリズムに近いという場合はどうなのか判らないが、ふつう歌と作業とは一体のものであり、早乙女は苗を正確に1拍おきに植えてゆかねばならない。苗取歌は作業上自とゆくりになるらしいが、挿秧の場合J=132ともなるとずいぶん早いテンポである。備後系では通常がJ=120であり、しかも歌は音域が広く旋律の起伏もはげしいという（5章6節）。他の地方の田植歌と比べて一体に田植ばやしのテンポが早いのは、リズミカルに囃したことと無関係ではないだろう。ところで今日採集される作業歌一般には作業のリズムと歌のリズムとが密着している例はむしろ少ないといわれ、また共同作業の場合は掛け声の時に作業をすることが多いが、この点からすると、田植歌は数少ない作業歌であり、とくに田植ばやしの場合の作業と歌の相互関係は注目すべき例と言える。ただやはり例外はあるようで、広島県安佐郡海田町のように音頭がうち間早乙女は苗をもつたまま立っていて、うたい終つた

(『広島県の民謡』)。いつれにしても作業と歌との問題の答えは簡単ではなさそうである。

さて第二部各論では総論の資料となつた各地域の田植ばやしについて詳述され、とくに著者が度々足を運ばれた広島県神石郡豊松村は音楽以外に關して丁寧に論じられ、また小笠原流、美濃・那賀郡系、高田郡系については音楽面で詳しい。ここにまで目にして止まるのは『田植草紙』の歌謡の復元であろう。『草紙』の成立が正確にいつ頃なのかは諸説あるようだが、それはともかくこのよきな形で民間の作業歌が残されたることは珍しく、また貴重である。音楽の方はそういう具合にはゆかないが、本書ではそれを、『草紙』の歌詞にきわめて類似した現行曲をベースにして、その旋律に『草紙』の歌詞を配分することによって復元してみせる。ほとんど同じ歌詞であるから不自然ではないが、オロシ型の復元では曲型Cに対してC'としているのはいかがであるか。標準型やゆりうたの場合と表記上は同じになるものの、これを曲型上まったく同レベルで考へるには少し無理なような気がするのだが。音階に關しては、一般に律

音階の民謡が陰音階化しやすい中で、田植ばやしには律音階が少くないことは先述したが、もし『田植草紙』の成立が中世末だったとすれば今日でも田植ばやしに少ない都節音階の曲が、当初からはつきりした形で存在していたかどうかは疑問であろう。

なお、石見系の『百姓稼穡元』所載の田植歌集(『日本庶民文化史料集成』卷五所収、三一書房)には、全歌にわたって唱歌の符号が記されているとのことであり(この翻刻では符号の部分はまつたく省略されているので不明だが、解題では、その符号が音階やリズムをあらわしていると推測されてい)、また幸いに安芸・石見田植草紙系歌謡との類歌が多いそうであるから解説・復元を試みられ、現行との比較考察をされるならばまた新たな発見があるかも知れない。

この他第二部では小笠原流と美濃・那賀郡系、つまり山陰側の田植ばやしに古い要素がみられるのと、中央部高田郡系は安芸と備後両系の正に狭間にあって搖れ動いていることがわかつて、興味深く読ませていただいた。後者では、先に触れた「大拍子」の曲型をベースに、同一調子(七七四調)に属する歌謡を音楽的に比較考察すること

によってそれらの推移関係を論考し、調型からでは判断できない「大拍子」(備後系)と「オロシ」(安芸系)との連鎖性を鋭く追究してゆく。この章は本書の成果のひとつとして評価されるであろう。

第三部は日本列島周辺の田植歌と題され、徳之島(奄美)、珍島(韓国)の田植ばやしについての論及である。前者によつて日本最南端の田植ばやしの例が紹介される。ここではとくに島の主なる芸能「八月踊」との比較考察が田植ばやしの音楽的性格をより理解しやすいものにしている(このよな考察は中国地方の場合、すなわち田植ばやしと地域の民俗芸能ーとくに類似性の強い太鼓踊などーとの関係においてはどうであろうか、また著者は八月踊と田植歌との民俗的・宗教的関連をも推測しておられるところから、両者についての新たな論考も期待される。

珍島の田植ばやしはきわめて日本のそれと似ているが、早乙女はいつも離しことばと備後両系の正に狭間にあって搖れ動いてのみをうたう形式で、日本に比べると素朴な作業歌のようである。この例でとくに興味深いのはリズムである。日本では2拍子で植えるのを珍島では3拍子で植えるとい

う。3拍子は韓国音楽の基本的リズムであるから不思議ではないかも知れない。ただ小泉文夫氏の調査報告によるところの、農村の仕事歌で「三分割のリズムは皆無であった」(『音楽の根源にあるもの』青土社、66頁)。ただし朝鮮半島の一部の調査といふ事実からすると、珍島の例は(歌の譜例は明らかに3拍子を示している)いろいろな意味で貴重である。なおこのことは先の徳之島と同様に、この島の他の曲種(仕事歌、一般民謡、芸能等)との関連においても考察してみるべき余地を残しているようと思われる。

第四部は簡潔にまとめられた結論であ

る。ここでは、中国地方の田植ばやしを特色づける二系統の音楽は、けつして音楽だけが個々別々に生れたものではなく、それをも包み込んでしまう、もつと大きな常民文化圏というものの対照性から出たものであることを改めて論述する。対照物が並列すればその接觸点が問題となつてくるのは当然である。そして本書でもその点に関してはじっくり考察し、音楽的側面からアプローチすることによって対照的な二系統の交

流に明解な推論を下したことは前述した通りである。ところでこの結論のはじめに著者は、中国地方の田植ばやしの歌謡の発生について現存の「太鼓を伴わぬ短歌の田歌のようないづれな田植歌から」創造されたものであろうと推定されている。現存のそれらを果して音楽的にプリミティブなものと言いきれるかどうかは別にして、この推理をさらに发展させ、先の復元を中心として田植歌謡成立への音楽的過程について追究することは不可能であろうか。

「人間と歌」に関心をお持ちの著者の研究は、既にテーマも、地域的にも、田植ば

・三六四頁・八、八〇〇円)
(おおぬき としこ・東京藝術大学)

内田るり子著『田植ばやし研究』

真鍋昌弘

田植草紙系歌謡を中心とする日本の田歌研究においても、これまでの歴史を纏めることを改めて論述する。対照物が並列すればその接觸点が問題となつてくるのは当然である。そして本書でもその点に関してはじっくり考察し、音楽的側面からアプローチすることによって対照的な二系統の交

力によって、その研究は着実に成果をおさめてきたのである。古く大正十五年の、三上永人氏『東石見田唄集』あたりを皮切りとして、佐佐木信綱氏や白田甚五郎氏などの中でも、これは特に諸分野からの接近と解説が必要とするジャンルであるが、主によつて、『中世近世歌謡集』(岩波日本古典文学大系)に異色古典歌謡文芸として、

やし以外の領域へと拡げられているが、田植ばやしに関しても残された四国をはじめ著者も挙げておられるインド・ネパール、南中國など周辺諸外国の調査研究を進められ、第二・第三の結果を再び公けにして下さることを期待している。最後に、本稿は音楽的側面からのみ述べさせていただいたが、それも単なる部分的紹介に終つたばかりか、お許しいただいたいと思う。

（昭和五十三年三月刊・雄山閣・A5判
・九〇〇円）